



私が高校に入学してちょうど一週間目のことだった。

担任の先生がホームルームで、全員ちゃんと部活に入れ、というようなことを言った。

若かった頃、空虚な生活ばかりしていたせいも、老いるのが怖かった。自己の存在に嫌悪すらした。が、部活に熱中していると、あっという間に時間が過ぎていたことがわかった。その瞬間、自己の存在を受け入れることができた。このまま老いていくことを能動的に肯定できたのである。自己の定義は他人との比較ではなく、自己が追求している"何か"によってなされるのである。即ち、"何か"の副産物が肝要なのであり、友人関係はては家族関係などどうでもいいのである。

他人を棄てても命を賭して守れ。兵士に剣先で心臓を刺された対価として、自己の"何か"を守ったアルキメデスのように。

私は、先生はそういうことを『部活に入れ』という言葉のみによって示したのだと理解した。先生に対する尊敬の念が心の底から湧き出ていた。

結局、私は大学に行き、テニスサークルに入った。

サークル内や他大学の男子、或いはナンパしてきた男とセックスに明け暮れる日々を送っていた。明け暮れるといっても、毎日ではなかった。

あの日は、サークル内の先輩と部室で交わっていた。事が終わるや、間が悪そうに先に先輩が部室を出た。私はしばらく、ひとり部室の中で虚ろゆく時間を過ごした。

部室の汗臭い青春の後があちらこちらに散らばっていた。時間を汚した痕だった。高校生るとき担任に対して溢れ出た尊敬の正体が、自分自身に対する将来の漠然とした期待だったことに気付いた。と同時に、無責任に無教養の人間に言葉<意味>を吐いた担任を酷く憎んだ。

私は、あのとき担任に目隠ししてレイプされていたのだと分かったと、先輩と交わった臍の中に気持ち悪さを感じた。

付近にあったテニスボールをカ一杯部室の汚れたドアにぶつけた。ドンとドアが唸ったあと、それはまたこちらの方へと跳ね返ってきた。跳ね返ってきたボールは、まだ衰えというものを感じていなかった。むしろ、もっともっととこちらに要求してくるようだった。うんざりした私は、しばらくボールを放置した。

ドアはそのまま開くことはなかった。

窓の日差しによって、薄汚れた毛布に包まり夜を明かしていたことに気付いた。寝ぼけ眼で眼前に落ちているボールを見ると、幾ばくか将来の不安を感じハッとしようとした。が、そのまま再び青春の影に包まれることにした。